



# 子どもの歳時記 1



## 小学生の頃の追憶

koberyol

東京都本町尋常小学校に通っていた頃の私の学業成績は、一年生の時は相当に悪いものだった。昭和のはじめ頃で珍しかったが、塾に指導を仰ぐようになってから成績はうなぎ上りによくになり、劇的に改善した。いうならば、塾通いによって刺激され、「やる気が出てきた」ということなのだろう。

やる気の昂進は、同時に学校での学業成績の上昇はもちろん、積極的な性格へと私を変えてくれたかと思う。

昭和のはじめ、本町尋常小学校では、およそ一学年に百五十名ほどの生徒が在籍していた。

百五十名は一組、二組、三組といったぐあいに五十名ずつ割りふられ、三年生になった私は二組になり、級長をつとめた。

四年に進級した二組でも級長、五年でも二組になり副級長となり、六年二組では級長になれなかった。

そして、はっきりいってこれは自慢だが（今から八十年近い前の小学校時代の成績を自慢するのも我ながらどうかと思うのだが）成績は全甲であった。

当時の通知表、一一昭和九年度から十四年度にかけての通信簿はいまだに私の手元の保存されており、調子に乗ってその内実を紹介すると、一年次と二年次は相当、成績が悪い。三年次から五年次にかけては塾と「やる気」のお蔭か、かなり成績が良くなっている。

ひとつおりの自分の成績のことばかりを書いたので、次は史料的価値ということになるかもしれないが、当時の成績表にどのようなことが記載されていたか、ここに書き記しておこう。

通知表には、当時の学校内での児童心得が次のように明記されていた。

- 稽古の中で分からぬ事は、よく聞きただすこと。
- 自ら進んで復習や下調べをすること。
- 行いを正して、よい人になろうと心懸ける事。
- 何事も骨身を惜しまず、精一杯すること。
- よく運動して体身（からだ）を丈夫にする事。
- いつも姿勢を正しくすること。
- 学校の往復に途中で無駄遊びをしないこと。
- 稽古の道具を忘れぬように気をつけること。

などとある。

また、家庭心得という欄があって、そこには家庭での心得えが具体的に指示されており、次のような内容になっている。

家庭心得。

- 病気若しくは止むを得ざる用事の外は欠席せしめぬ様にされたきこと。
- 登校時間に遅れぬ様、出席せしめられたきこと。
- 忌引・転居などの場合には、直ぐに届け出されること。
- 服装は質素に、携帯品は実用向けの物を持たせられたきこと。
- 学用品、雨具、手拭、帽子などの持物には、何れも学年と氏名とを書かれたきこと。
- 金銭を与える場合は、充分其の用途に注意せられたきこと。
- なるべく小遣帳をつける様に躰けられたきこと。
- 児童の予習復習を奨励せられたきこと。
- 学校の事に関し、不審があるときは学校に確かめられたきこと。
- 時々、学校を参観し、児童の教育上につき遠慮なくご協議ありたきこと。

当時、小学校の始業時間は朝の八時であり、その前に全校生徒は校庭に参集して、「日の丸」の掲揚を实践した。雨天には中止されたが、晴天時には必ず実行された。国旗掲揚のあとは体操をした。

それから運動会のことについても書いておきたい。

秋に開催される運動会は、子ども心にもうれしかった。十月中旬ごろには、開催されていたからと思う。

私の記録だが、一年次、二年次の七十メートルの徒競走では二等を取った。

五年次の百メートルの徒競走でも二等だった。六年次での徒競走では三等賞を受け、その時の賞状は今も保管している。

また、いただいた賞のことに書いたので、ついでに触れておくと、書き方（書道、書初め）では渋谷区内市立小学校児童作品展覧会に出品し、渋谷区教育会長公爵徳川圀順より賞状を授与されている。

次に季節の思い出を書いておくことにしよう。

今でも脳裡に焼きついているのは、本町小学校の校庭で四月に咲く桜のことだ。

進級時に咲いた桜の花は、見事に毎年、蕾をつけ、花開くことで、私たちの成長を一年づつ刻んだ思い出となってくれたように思う。

夏がくれば、夏休みがうれしくて、京王多摩川の「林間学校」に参加したものだ。

よしずを張った小屋で、蚊の襲来に悩まされながら寝た記憶がある。

それから多摩川で泳いだことや、小鳥が舞う河原で大小の石を集めて「かまど」を作り、煮炊きをしたことが印象に残り、とりわけ野外での料理は、何か新しい発見をしたような、子供心にも特別とっていいほど、楽しい経験だった。

秋には町内の氷川神社の祭りがあった。

境内には子どもがよろこぶ夜店が所狭しと店をだす。

この神社は、どのような神様をお祭りしているのか、子どもの私たちは知らないが、社殿の頭上に大きな「鈴」があり、それを手元にある太い麻縄を振り回して、ガラガラという音をさせたあと、手を合わせて拝むのである。賽銭を入れる時と、入れない時もある、いいかげんなものだ。

境内には中央に舞台があった。ヒョットコなどの能面をつけた踊り人が、御神楽の笛や太鼓、鉦の音に合わせて踊るさまは楽しいが、神事とは考えもつかず、子ども心に不思議なことに思えてならなかった。

そして冬、いよいよお正月の思い出だ。

竹と松を組みあわせた飾りは、ご承知のとおり門松だが、この門松は、町内の業者が暮れの押し詰まった時期に門前に組み立てにやってくるのだった。もちろん、竹や松の材料費のほかに工賃も入れて請求される。

今はもうこのような行事は行われなくなった。私の子どもの頃は、正月を過ぎればこの門松は、子ども達のうれしい遊び道具になる。すなわち竹馬である。

竹馬は、解体された門松の竹をもちい、二本の竹の棒のほどよい辺りに横木をつけ、自分たちでつくった。横木に足をのせ、両手で竹を握り、バランスを取りながら歩くのである。

横木を高いところにつければ、高所より見渡しながらかけるわけで、この高さがもたらす優越感、この上もなく楽しいものであった。